使徒行伝連続講義（１）（東京療養所東講堂）

わが証人となれ
――使徒行伝第１章１～16節――

１９５７年５月25日
小池辰雄

父の五十回忌は真言宗で　原始福音（ウルエヴァンゲリウム）　聖霊の約束　復活のキリストの証人　素晴らしい現実が来る予表　聖霊の能力を受ける　聖霊のバプテスマ　人間は自分が見えない　十字架・復活・聖霊のキリストの証人　聖霊行伝の先を身をもって書く　最後の新天新地が来る　心を一つにしてひたすら祈る　ジョン・ウェスレーの回心　死んでも死なない生命をいただく　祈り

【使徒行伝１】

１テオピロよ、我さきに前の書をつくりて、凡そイエスの行いはじめ教えはじめ給いしより、２その選び給える使徒たちに、聖霊によりて命じたるのち、挙げられ給いし日に至るまでの事を記せり。３イエスは苦難をうけしのち、多くの慥なる証をもて、己の活きたることを使徒たちに示し、四十日の間、しばしば彼らに現れて、神の国のことを語り、４また彼等とともに集りいて命じたもう『エルサレムを離れずして、我より聞きし父の約束を待て。５ヨハネは水にてバプテスマを施ししが、汝らは日ならずして聖霊にてバプテスマを施されん』

６弟子たち集れるとき問いて言う『主よ、イスラエルの国を回復し給うは此の時なるか』７イエス言いたもう『時また期は父おのれの権威のうちに置き給えば、汝らの知るべきにあらず。８然れど聖霊なんじらの上に臨むとき、汝ら能力をうけん、而してエルサレム、ユダヤ全国、サマリヤ、及び地の極にまで我が証人とならん』９此等のことを言い終りて、彼らの見るがうちに挙げられ給う。雲これを受けて見えざらしめたり。10その昇りゆき給うとき、彼ら天に目を注ぎいたりしに、視よ、白き衣を著たる二人の人かたわらに立ちて言う、11『ガリラヤの人々よ、何ゆえ天を仰ぎて立つか、汝らを離れて天に挙げられ給いし此のイエスは、汝らが天に昇りゆくを見たるその如く復きたり給わん』12ここに彼等オリブという山よりエルサレムに帰る。この山はエルサレムに近く、安息日の道程なり。13既に入りてその留りおる高楼に登る。ペテロ、ヨハネ、ヤコブ及びアンデレ、ピリポ及びトマス、バルトロ

マイ及びマタイ、アルパヨの子ヤコブ、熱心党のシモン及びヤコブの子ユダなり。14この人々はみな女たち及びイエスの母マリヤ、イエスの兄弟たちと共に、心を一つにして只管（ひたすら）いのりを務めいたり。

15その頃ペテロ、百二十名ばかり共に集りて群をなせる兄弟たちの中に立ちて言う、16『兄弟たちよ、イエスを捕うる者どもの手引となりしユダについきて、聖霊ダビデの口によりて預じめ言い給いし聖書は、かならず成就せざるを得ざりしなり。

●父の五十回忌は真言宗で

お伺いするのが少し遅れまして申し訳ありませんでした。実は、今日、私の父の五十回忌という――今日がその日とういうわけではないけれども――大阪の兄貴〔龍二〕が出てきましたものですから。今、家族全部生きていれば八人〔註〕のところ、今はもう兄と私との二人っきりでありますが、それで、父の五十回忌をしようというわけで、坊さんに来てもらいまして、お教をあげてもらったんです。

〔註：家族八人。父小池政吉（1856～1908）享年52才、母光子（1869～1957）88才、政美（1895～1921）26才、龍二（1898～1993）95才、富士子（1899～1949）50才、三郎（1901～1901）０才、辰雄（1904～1996）92才、愛子（1907～1914）７才〕

私の父は日蓮宗であったということですが、どうも近所に日蓮宗の坊さんが居ないものですから、近所の真言宗の坊さんに来てもらって、それでお父さんに少しわるかったかも知れませんが、まぁ同じ仏教だと思って、その坊さんにお経を上げてもらった。私は坊さんのお経を聞いていて、始めの半分は日本語でよくわかりましたが、あとの半分はサンスクリットの原語でやってましたが、ちょうど何か異言でも聞いているような具合で、瞑目して聴いていましたが、非常に心地よかったです。

もし、私が昔の無教会の信仰であったなら、およそそういうことはしないで、

「いや、キリスト教でやろう」

というわけで、反対したろうと思う。ところが、私は今日、もちろん喜んでお父さんの、とにかく仏教で――日蓮宗でなかったのは悪かったけれども――真言宗でやりました。何も妙な、気持の悪い気はしませんですしね。まことにこちらも無心になって、坊さんは一生懸命やってくれましたから、感謝してそれに連なっていました。

どうもおかしいですね――おかしくはないんですけれども――キリストの、聖書の中に私がとにかく限りなく入ろうという、ただこの一念で生きておりますと、眼界が非常に広くなるし、また一切のものを包含してしまうような魂に、だんだんされていくんですね。仏さんの世界も全てこれ、包摂してしまうといったような角度で実に楽に、そして決してこっちが傲（おご）ったような気持ではなくして、まことに謙虚にこれを承り、しかもこれを本当の意

味において祝福し、また父のために祈ることもできるという、ちょっと説明のできないような境地です。

これはヨハネ伝の16章の終りに、

「我すでに世に勝てり」

と、キリストは一切のものに勝っておられる。一切のものに勝っているということは、

「アモール　オムニア　ヴィンキット」〝Amor omnia vincit.〟

「愛は一切に勝つ」

という。キリストの愛が一切に勝ち、一切を救い上げ、一切を包摂してしまう。そういうことを観念で決めつけるのではなくて、事実をもって私はこれを言うことが――キリストがその中に入るというと、自分もそのようにキリストが我がうちにあって――そのようになし給うということを証言することができる。

しかも、この真言（しんごん）というのは、その坊さんに、

「真言というのは一体どういうことですか？」

と聞いたらば、

「これは心と言葉と身（からだ）とが一つになって、そこにズレのない一体であるような境地を真言という。それは即ち、即身即仏というこの生まの身そのものが仏であるというその境地に、そうなれば入る」

というわけで――私は真言宗のことを詳しく知りませんが――とにかく、坊さんが一言、そういうふうに私に説明しましたから、

「ハハァー、そうですか」

と。「真言」というのは「真の言（まことのことば）」と書くので、実はまことの真言宗はキリスト教である――そんなことは坊さんに言いませんけれども――私はそう心の中で思って、大変面白いと思いました。私がしょっちゅう申し上げていること、即ち

「信行言一如」

ということは実は、真言宗の一番根本観念であったということを今日知りまして、大変愉快でして、なるほど私たちもこれは真言宗の奥義にとにかく通ずるものを持っているなぁと思う。しかも、その「言と心と身」――身というのは要するに行為のことになるでしょうが――これが一如の世界ということを真に在らしめるところのものは、本当にキリストが在らしめるので、その内実においては、イエス・キリストの右に出るものはない。

それで、真言宗もその意味において、福音の中に入ってしまうということを、私はそうやって楽に聞こえたわけも、なるほどそういうわけであったなぁということも、坊さんといろいろ話していてわかった。私があまりいろんなことを興味をもって訊いたりするものですから、坊さんの方も少し珍しいような、驚いたような顔をしていましたが。大変気持よく別れて、私はもう握手したいくらいに嬉しかったけれども、まぁ握手はしませんでしたけ

れども、驚くと思って。それで、私のお父さんに対しても、大変気持のいい法事をしたと思って、そんなことや何かで、少し遅れてしまった。

●原始福音（ウルエヴァンゲリウム）

今日は皆さんも使徒行伝の第一回というわけで、今、司会者も心をこめて祈ってくださったように、その意気込みでお臨みになった思います。私も、そのつもりであります。

使徒行伝は、その序論的なことを言っても始まりませんから、そういうことはみんな止めます。これは学者によっては、ルカの筆であることを疑う人もあるようですが、ルカの書いたものとみて差支えないと思います。これはローマで書かれたのではなかろうか。その年代も、パウロが最後の時、即ち紀元61年、62年というような頃に書かれたろうといわれていまして、パウロがまだ殉教というところまではいかない時に――パウロの殉教のことはこの中には書いてありませんから――大体、そんなことだろうと思われます。

1テオピロよ、我さきに前の書(ふみ)をつくりて、凡(おおよ)そイエスの行いはじめ教えはじめ給いしより、2その選び給える使徒たちに、聖霊によりて命じたるのち、挙げられ給いし日に至るまでの事を記(しる)せり。

即ち、ルカ伝の内容はその通りです。

「凡(おおよ)そイエスの行いはじめ教えはじめ給いし」

ということは勿論、

「福音を宣べ伝え始められた、またその御業を行い始められた」

という意味に素直にとっていいと思います。

「挙げられ給いし」

ですから、昇天です。けれどもまた、イエスのなさったこと、言われたことは、イエスの全活動は即ち福音の原始(はじめ)であるという意味で――それはマルコ伝のはじめの方の気合と似たような気持もそこにとれないことはないと、ある学者は、ホルスマンなんかはそのようにとっていますが――イエスの全活動が即ち福音の原始であるというような意味も、このギリシヤ語原文の文章としてとれないことはないらしい。そうなってくると、私たちが

„Urevangelium（ウルエヴァンゲリウム）“「原始福音」

といっている、キリストの原始福音のことを言っていると、そういうような二重写しにこれを解釈してもよかろうと思います。

「その選び給える使徒たちに」

使徒たちは勿論、キリストが選んだと福音書にある通りです。

「聖霊によりて命じたるのち、挙げられ給いし日に至るまでの事を記(しる)せり」

キリストの命令はすべて聖霊によっております。

3イエスは苦難(くるしみ)をうけしのち、

「苦難をうけし」という言い方は勿論、単なる苦難でなくて、十字架の苦難のことを言う。イエスは十字架にかかられたのち、

多くの慥なる証をもて、

「証」「テクメーリオン」です。

己の活きたることを使徒たちに示し、四十日の間、しばしば彼らに現れて、

原文には「しばしば」という字はありませんが、気持は「しばしば」でいいわけです。

神の国のことを語り、4**また彼等とともに集りいて命じたもう『エルサレムを離れずして、我より聞きし父の約束を待て。**5**ヨハネは水にてバプテスマを施ししが、汝らは日ならずして聖霊にてバプテスマを施されん』**

と言われた。「四十日」というのは勿論、本当に四十日であるかどうかは、学者も疑うわけですけれども、しかし、荒野の試誘における四十日、またイスラエルの曠野における四十年といったような意味において、「四十」という言葉が特別な、こういったときの意味あいをもって語られているわけなんでしょう。

●聖霊の約束

ルカ伝の終りの方の24章44節に、

「44**また言い給う『これらの事は、我がなお汝らと偕に在りし時に語りて、我に就きモーセの律法・預言者および詩篇に録されたる凡ての事は、必ず遂げらるべしと言いし所なり』**

「遂げらるべし」の「べし」は非常に強い「べし」です。「遂げられないではいられない」ということ。

45ここに聖書を悟らしめんとて、彼らの心を開きて言い給う、

これは復活のキリストですよ。

46『かく録されたり、キリストは苦難を受けて、三日めに死人の中より甦えり、47且その名によりて罪の赦を得さする悔改は、エルサレムより始りて、もろもろの国人に宣伝えらるべしと。48汝らは此等のことの証人なり。49視よ、我は父の約し給えるものを汝らに贈る。汝ら上より能力を著せらるるまでは都に留れ』」（ルカ24・44～49）

勿論、学者は、

「この言葉はキリストの言葉ではなくて後で整えたのだろう」

なんてことを言いますけれども、それは言葉が整ったかも知れない、ここに書かれている言葉は。しかし、このような事態のことを言われたことは、私たちは当然信じなければならないと思います。「父の約し給えるもの」とは、言うまでもなく聖霊です。

「父の約し給えるものを汝らに贈る。汝ら上より能力を著せらるるまでは都に

留れ」

同じこのルカ伝の始めの方に、マリヤに聖霊が臨むときに、この「能力」という言葉が同じく出ています。ルカ伝1章35節に、

「35 **御使（みつかい）こたえて言う『聖霊なんじに臨み、至高者（いとたかきもの）の能力（ちから）なんじを被（おお）わん。此の故に汝が生むところの聖なる者は、神の子と称えらるべし。』**（ルカ1・35）

ヨハネ伝の16章は非常に大事なところですが、この聖霊の約束のところです。そこにおいても如何にキリストが、ここを去ることがむしろ益であって、遠ざかることによって逆に近づくのである。キリストは天界に行くことによって逆にこの地界にいた時よりももっと近づくのだと。それは何によって近づくのか。御霊において近づくのである。

そして、パウロは、

「この御霊は一切のことを知らしめる」

と言っている通りです。その意味において、神の霊が水の面にあったという、もう創世記の第1章から、

「御霊よ、御霊よ、来たり給え」

と、黙示録の終りに至るまで神の霊における一切の現実である。聖書は神の霊における現実であることは、我々がいくら深く自覚しても、決してそれで過ぎるということはない。

その点でむしろ、今のキリスト教界全体が、教会といわず無教会といわず、あるいはカトリックといわず、とにかく大体においてズレている。しかしながら、それに目覚めた素晴らしい人たちが勿論、現われています。尊敬すべき人たちが方々に現われていて、大変それは共に喜ばしきことですけれども、私たちはいよいよ、いい加減なことでいい気になることは絶対にいけません。いよいよ深く聖書の人となりたい。その意味において、皆さんと使徒行伝をしばらく学びたいというわけです。

●復活のキリストの証人

キリストが十字架に上ってから、

「多くの慥（たしか）なる証（あかし）をもて」

即ち復活して、

「己の活きたることを使徒たちに示し」

キリスト自身が、イエス自身が、彼が生きて在る。「活きて在る」ということは、単に生きていることではない。神さまの永遠の生命をもって、聖きまた深き愛と義の生命、これをもって現に活きて永遠に在る。これが神の国の来る証拠である。神の国が来る証拠は、キリストが罪の贖いの大業をなしおえて、救いの完成をするために、彼自身が復活の霊体をもって現われて来なくては、事実をもって現われて来なくては。

これは即ち真言（しんごん）です、本当の言葉です。この真なる言葉そのものとして、また行そのものとして、神の具体的な身証、身をもってする証そのものとして、キリストが現われた。これは各福音書の終りにはっきりと証言してある通りです。

「もし、この復活がなかったならば、我々の信仰は虚（むな）しい」

とパウロはコリント前書15章で畳みかけて言っています。特にその15節において。パウロもあれほどにコリント前書15章でキリストの復活のことを、復活のキリストのことを強調しないではいられない。始めの方では、

「十字架のことの他は語るまじと思う」

と言いながら、15章にいくと徹底的に復活のことを説いている。これは矛盾でも何でもない。十字架を徹底的に説く者はまた復活を徹底的に言わざるを得ない。またそれは同時に、聖霊の事態をまた言わざるを得ない。だから、この

「十字架と復活と聖霊」

の事態は、申し上げている通り、絶対に切り離すことができない。何故、

「お前たちはエルサレムに留まって居ろ」

とキリストは言われたか。このエルサレム城外でキリストは十字架にかかった。そして、その墓から彼は墓を蹴破って甦えってこられた。同じエルサレムにおいて、聖霊は臨んでくる。即ち、場所的にいいましても、この同じエルサレムにおいて十字架され、また復活し、聖霊が臨んでくるという、のっぴきならない事態をキリストは、

「汝ら留まって居れ。十字架で敗けたのではないぞ」

と。彼らが嘲ったその屈辱の極みであるところの十字架は、逆にその嘲りをもって敵を救った。迫害をもって、逆に敵を救い贖いとってしまい、そして、この復活の生命をもって事実、証明した。

弟子たちがみんな散り散りバラバラになってしまったんでしょ。もし日の下にキリストの復活が事実として臨まなかったならば、私たちには絶対に希望（のぞみ）がない。本当の望みらしい望みはない。我々になぜ、望みがあるか。希望があるのは、復活のキリストという事実が、私たちに望みを与えるのであって、我々の願望ではどうにもならない。

我々の悲願が、我々のいろいろな望み、その悲願が本当に霊願として達成される、その証拠はどこにあるか。これはキリストの復活にある。使徒たちは一体、何の証人であるか。彼らはみな

「復活のキリストの証人」

なんです。十字架のキリストの証人になったって仕様がない。十字架のキリストというのは、その当時、十字架というものが何のことだか分からないんですから。十字架はキリストの敗北だと思っていた。そこのところで見たって、まだよく分かってないんです。

●素晴らしい現実が来る予表

６節へいくと、

6弟子たち集れるとき問いて言う『主よ、イスラエルの国を回復し給うは此の時なるか』

どういうことですかね、復活のキリストに向かって。いいですか、復活しているキリストに向かって、なおこういうことを言っている。

「主よ、イスラエルの国を回復し給うは此の時なるか」

まだ彼らに聖霊が臨んでいないから、問うことがこんな程度です。イスラエルの国を回復し給うはこの時であるか。キリストが甦えってきて喜んで、

「さぁ今度は、イスラエルの国を回復してくださるわけですねぇ」

というわけです。彼らの希望はまだ本当に希望になっていない。即ち、伝統的なメシヤであろうと思っていたキリストが十字架にかかって、これは駄目だ。けれどもとにかく、復活したから、少しは望みはかえしたけれども、それでも彼らは地上に何か政治的な勝利を得て、この地上に天国的に、現実にイスラエルの国というものが回復されて、全ての民がこれにエルサレムを中心として承服する、という時を望んでいる。これはもっと奥までずっと貫いていけば、神さまの最後の国の現実は――それとは違いますけれども――そういう譬えをもって表現することができるような国であるには相違ない。けれども、その望みは彼らにとっては直線的です。そういった直線的な具体的なイスラエルの国の回復というようなことを一生懸命で言っている。その点においては、どこまでもユダヤ人というのはものすごく現実的なんです。ユダヤ人くらい現実的な民はない。

その現実性がしかし、突き抜けたから、

「わが国はこの世のものにあらず」

という。この世のものでない。しかしながら、この世のものでない神の国というものは、空想されている、想われているところのものではなくして、現にこの地上に臨んでくる。そしてまた、お前たちの中に「現に在る」という驚くべき現実。見えないけれども、もっと素晴らしく在るという――イスラエル人の相対的にしつっこい現実性を突き破って――本当の現実性というものをもたらすものが、これがキリストの福音である。

キリストは当時の病人たちを片っ端から癒した。それは現実の、彼らに今の今、現にある悩みを喜びに変えた。それものっぴきならない現実です。けれども、その彼らの病を癒したというこの徴は、神の国が来るときには、もはや再び死なないところの本当の生命の表現として、キリストは病を癒した。それが本当のところにいくというと、もう完全に霊体となって再び病むことのない、再び死ぬことのない、霊魂と霊体とになる。その表現として、徴として、彼らを現実ののっぴきならないところで――ただ説教しているのではない――事実、彼らを癒した。これはもっと素晴らしい現実が来る予表である、徴であると

いうことが、キリストの癒しの意味です。

そういう意味において、このキリストの福音は極めて現実的だから、この復活のイエスが現われた。彼らは復活のイエスの証人とはなったけれども、本当に使徒行伝において甦りの徴をペテロが、またパウロが、

「我らはキリストの証人である」

と、本当に宣べ伝え得たのは、聖霊を受けてからです。だから、同じ復活して喜んでも、初め復活したキリストに会って喜んだときの喜びは、まだ相対的現実における、キリストの復活における喜びです。けれども、聖霊を受けてからの喜びは――その復活のキリストはもう天上に行って、キリストはもういないけれども――聖霊を受けてから復活のキリストの喜びというものは、復活のキリストに現に遭ったよりかもっと素晴らしい喜びになった。そこを間違えないように。

だから、じきじきに、まだ十字架を経ないキリストに癒されたり、驚くべき言葉を聴いたり、憐憫に遭ったりしていた、その現実もまだヴェールがかかっていた。それが聖霊が臨んでから、あの時のあの言葉は、あの行為はこういうわけであったということで、いよいよこれが一切、掴(つか)めてくる。復活のキリストに会ってもなお、

「主よ、イスラエルの国を回復し給うのはこの時なるか」

なんていう問いを発している時ですから、まだ喜びが本当の喜びではない。

●聖霊の能力を受ける

7イエス言いたもう『時また期は父おのれの権威のうちに置き給えば、汝らの知るべきにあらず。8然れど聖霊なんじらの上に臨むとき、汝ら能力(ちから)をうけん、而してエルサレム、ユダヤ全国、サマリヤ、及び地の極(はて)にまで我が証人とならん』

キリストはその問いに対して、詳しい説明はなさらない。

「時また期は父おのれの権威のうちに置き給えば、汝らの知るべきにあらず」

「イスラエルの国を回復し給うか」

なんて聞いているけれども、そんなことはどうでもいいんだと。「時また期は」、はじめの方の「時」は「クローノス」という字、あとの方の「期」は「カイロス」という字ですが、

「それはどれ位の時間がたってから来るか、またどういうのっぴきならない重大な時期にやってくるか」

と。その「時また期」というのはそういうわけです。

「それは父が知っていらっしゃるので、その時のイスラエルの回復というのはお前たちが思うようなイスラエルの回復ではないよ」

と。それは説明なさらないけれども、そういう意味です。

「父おのれの権威のうちに置き給えば、汝らの知るべきにあらず。8然れど聖霊なんじらの上に臨むとき、汝ら能力をうけん」

この8節が大事なんです。

「けれども、お前たちの質問が実は間違っている。聖霊が汝らの上に臨んだときは、汝らは能力をうける。イスラエルの国の回復ではない。イスラエルの国の回復が問題ではない。お前たちが本当に神の能力を受けることが大事なんだ」

と。この「能力」は自然力ではない。神さまの能力ですよ、「能力を受けん」というのは。神の能力というものは、ただ自然の暴力でもなければ、単なる自然的な生命力とかいうことではない。

「汝ら聖霊の能力を受ける。而してエルサレム、ユダヤ全国、サマリヤ、及び地の極にまで我が証人となるであろう」

聖霊は、「そこに助けのために呼び出されたもの」という、「パラクレイトス」という意味はそういうわけです。私たちが信仰に入る、いわゆる悔い改める、いわゆる信仰に入って聖書のことがわかってくる。そしてとにかく、

「十字架の贖罪がわかり、神さまの独子であるキリストは贖ってくださった。甦えって私たちにもその希望がやってきた。やがて神の国が来る。待っていましょう」

というわけで、普通の信仰はそういった事態を慰めとし、励みとし、喜びとして受けとっているわけです。けれども、「聖霊が臨んで来る」ということは、その一人ひとりにあって、確かにある質的な相違をきたすことなんです。はっきりと自分で、ある質的な相違の断層を突破してきたということを感得せしめる事実です、「聖霊が臨む」ということは。

このことは、私は無教会にいて何年も無教会の立派な先生方から教えを受けていましたけれども、「聖霊が臨む」ということを私は知らなかった。それがとにかく、今より数年前にどのようにして臨んだか、これは祈りが――今までの祈りはまちがってはいないけれども――まだ祈りの質が本ものでなかった。次元がまだズレていた、ということに気がついた。

●聖霊のバプテスマ

彼らに聖霊が臨んで来たことは、やがて使徒行伝の2章に出てくるところですけれども、

「エルサレムを離れずして、我より聞きし父の約束を持っていろ」

と。彼らはどのようにして待っていたかというと、彼らは祈り待っていた。

14 **この人々はみな女たち及びイエスの母マリヤ、イエスの兄弟たちと共に、心を一つにして只管いのりを務めいたり。**

心を一つにしてひたすら祈りをつとめていた。これが大事なんです。ですから、聖霊が臨んでくる絶対条件は祈りです。祈りがないところに聖霊は来ない。

それは時には突発的にやってくることもありますよ。パウロがまだサウロといっていた

頃、クリスチャンを一生懸命に迫害していた。そのサウロはダマスコ途上で復活のキリストの顕現に出会い、恩寵としてぶっ倒された。クリスチャンを迫害していた時に逆に打たれた。勿論、彼は平伏（ひれふ）してしまったから、本当に彼に聖霊が臨んできた。これは復活のキリストに打たれて、それから聖霊が臨んでくる。やっぱりそこには、キリストの恩寵によってパウロは深い祈りの世界に入れられて、本当に彼に聖霊が臨んできたんです。

要するに、どういうことにしても、そこに祈りというものがないところに聖霊が私たちの中に臨んでくるということはないわけです。

「ヨハネは水にてバプテスマを施したけれども、汝らは日ならずして聖霊にて
バプテスマを施されん」

これは、洗礼のヨハネ自身が既に預言していることでして、皆さんもご存知の通りです。マタイ伝3章11節、

「11**我は汝らの悔改（くいあらため）のために、水にてバプテスマを施す。されど我より後に**
きたる者は、我よりも能力（ちから）あり、我はその鞋（くつ）をとるにも足らず、彼は聖霊と
火とにて汝らにバプテスマを施さん。」（マタイ3・11）

御霊はまた「火」の如き、火というような表現でも言われるわけです。

「我、火を投ぜんために来（きた）れり。この火、燃えたらんには……」

とキリストが言われたその「火」というのは御霊のことです。

新しく私たちが新生せしめられるところのバプテスマが、新しく生かされるところのバプテスマが、これが「聖霊のバプテスマ」です。

「水にて施すバプテスマ」というのが「悔い改め」ですから、これはキリストの十字架です。私たちは「水」といっても、これはキリストの血のことですよ、言い換えると。キリストの十字架の血です。贖罪の血、我々のために生命を捧げて、そして、罪の潔めを、「我」というこの罪の潔めをすっかりされた。そのキリストの十字架の贖罪に私がぶつかって初めて、悔い改めができる。

「ああ、私は悪かった」

といって自分で悔い改めたって、決して本当の悔い改めはできない。キリストの恩恵が、十字架の贖罪の恩恵が、贖罪の愛が、私たちを悔い改めに導くんです。

この十字架の贖罪の愛にぶつかって、

「ああ！　本当に自分は間違っていた！」

と、自分を一切そこに投げ出してしまう。

「ああ実は、あそこに自分は投げ出されていました。十字架の上に私はすっかり葬られてありました。この葬られない我のためにキリストは葬られてくださった」

と。これが即ち、「悔改のバプテスマ」です。私たちに本当の悔い改めのバプテスマを来（きた）らせるものはイエス・キリストの十字架である、「水」というのは。この十字架を深く仰ぎ、

そこに自分を本当に十字架することなくしては――いや実に十字架されている。「十字架する」なんていうと、こわいように思うけれども、十字架されている――十字架されていることに気がつけば、本当にそこに悔い改めが生ずるんです。

●人間は自分が見えない

「信仰が駄目である、勉強が駄目である、こういうことをしようと思っても三日坊主である、こういう癖を直そうと思っても駄目である」

とか、私たちは様々の駄目なものを持っています。しかし、そんな駄目なものはよくならない。善くなってもそれは少しで、ある程度しかよくならない。根本的にはひとつもやっぱり駄目です。だから、その駄目さ加減をすっかり駄目にしてしまったのが十字架なんです。

「心配は要らん。駄目なまんまでよろしい。駄目なまんまでいいから、もう何も考えなくていい、自分なんか見ている必要はないよ」

と。私たちは一体、自分が見えるんですか。自分の顔が自分で見えますか。私たちは自分の顔が自分で見えるつもりでいるけれども、実は自分が見えない。ありがたいことです。私たちは自分が見えないように出来ている。自分が見えないように出来ているくせに、自分ばっかり見ようとしている。人間というのは馬鹿なもんですね、自分が見えないのに。

「アントローポス」「人間」

というギリシヤ語は

「上を見る者」

という意味です。自分自身の上を見る者をアントローポスという。「人間」というという言葉は即ち「上を見る者」。私たちは立っている、直立している。即ち、天界の神を仰ぐようにできているんです。横を見たり、あるいは地面を鶏のように見るようにはできていない、人間だけは。他のものは匐うけれども、人間は立っている。ヘルデル（ヨハン・ゴットフリート・ヘルデル　1744～1803）という人がその歴史哲学の中で書いています。

人間は上を見る者です。自分は見れない者です。ありがたいんです。私たちは自分が見れないという恩寵の中にありながら、「自分を見る」という馬鹿げたことをしている。人間は神さまを見るようにちゃんと出来ている。人間は神が創造り給うた最高のものである。そして、神を見てこそ、私たちが本当に天を仰いでこそ、本当に私たちは活きる。天を仰いでこそ、私たちの霊魂は大きく呼吸できる。天を仰いでこそ、私たちは「父よ！」と祈れる。祈りの態勢自身が何か非常に地面にへいつくばったようなことではダメです。それはある時は本当に平伏しますよ。けれども、本当に神さまの前に平伏すことは、神さまの前に本当に今度は仰ぎ見ることです。そういう意味において、キリストは私たちを、

「自分を見る必要はない」

ということを、

「自分を見ることははっきりともう止めましょう、キリストを見ていきましょう。自分でローソクの灯をともして、電気をともして本を見ることを止めましょう。太陽の光で見ましょう、キリストの光で見ましょう」

と。霊界の太陽、キリストの光で我らはこの聖書を読む。註解書や何かを私はここに並べましたけれども、これはまぁちょっと参考に並べただけで、こんなものはどうでもいい。私たちは直接にこの聖書にぶつかって、そしてキリストの霊の光をもって見る。キリストの霊の光によってだけ、聖書は本当に読める。その外のどんなお道具立てをしても、聖書は読めない。ところが、道具立てと、学者のいうことばっかりが、馬鹿に権威があるようになってきた。特に都会の信仰はおかしい。

●十字架・復活・聖霊のキリストの証人

それで皆さんは、戦って戴かなくては困る。方々の教会は見たところ、なかなか盛んですよ。私は決してそれにケチつけない。みんな結構です。大いに盛んになってください。けれども、その人数が盛んなのが一体、何が盛んなのか。皆さんは少ない。けれども、少なく乏しいようで、この集会は駄目のように見えても、どっこい、ここにはたとい千人の集会といえども、絶対に負けないところのものがあるかどうか。それは今日、私がここに掲げた

「わが証人となれ」

ということが、皆さんに本ものとなるならば、もう

「敵は千万人といえども我往かん」

ということになる。そういうクリスチャンにならなかったら、もう聖書はむしろ止めた方がいい。それは仏教でも何でもいいですよ。聖書を読み、福音に接するというならば、「証人となる」ということがアルファーにしてオメガーであります。始めであって終りです。証人となることなくして聖書を読んでも、これは始まらない。

「証人となる」

というのは一体、何の証人となるか。使徒たちは復活のキリストに出会って、

「私たちは甦ったキリストの証人である」

と言った。勿論そうです。けれども、私たちがこの「証人」というときには、先ず第一に、十字架のキリストの証人でなければダメです。

「汝、おのが十字架を負いて我に従え。然（しか）らざればわが弟子となることができない」

とある。即ち、パウロが、

「我、キリストと偕に十字架につけられたり」

と。つけられたり！　つけられて在る！　十字架に。十字架されてあり、また十字架されてありつつ進んで行く。十字架の恩寵を受けることなくして、十字架を負うことはできま

せんよ。そんなことをしたって、それは倒れてしまう。十字架の恩寵によって、私たちがすっかり「我」というものから外されてしまって、自分を見るということが止まってしまって、ただひたすらにキリストを見る。

「ああ、キリスト、この素晴らしい恩寵のキリスト、十字架によって贖ってくださったこのキリスト！　我は贖いとられたものである！」

と。この十字架の贖いのキリストの愛を、これをもし、水を割ったり、拒んでいたならば、私たちは十字架の、贖罪の、愛の証人ではない。自分をみているうちは証人ではない。キリストの愛を本当に受けて、

「私の中にはキリストの愛があふれて仕方がありません、泉の如く」

というならば、それがキリストの十字架の証人です。どんなに躓いても転んでも、自分を見るようなことを致しましても、そんなものを常に新たに乗り越えていく。

ちょうど私たちが常に新たに呼吸して、新しい空気で、血がしょっちゅう新しくきれいになっているでしょ。そのように十字架の愛が私たちを常に新たにきれいにしていく。この十字架の愛の、キリストの血潮というこの水が、キリストのこの宝血が、私たちのこの血管に、霊的血管に通うようなことになっているときに、初めて私たちは十字架のキリストの証人であります。いいですか。この証人となっていなくて、何の復活ぞや。そうして、その愛が来ていれば、その愛は同時に生命なんです。

キリストの流した血は同時に生命を与える血なんです。キリストは神の生命をもって生きておられた。その生命はいくら十字架において血は流れても、血は最後の一滴まで十字架の下に滴り落ちても、蒼白のキリストとなっても、キリストにおける神の血は――今言ったのは生理学的な血ではありません――キリストの血は、その蒼ざめたキリストの中に、新しい神さまの生命というものは、このキリストの中に、かつて地上におられた時に生きていたよりも、もっと素晴らしい姿において、キリストを甦えらせてしまう。彼の肉体を、蒼ざめたその冷たい肉体を完全に霊体に変えてしまうような驚くべき生命が入ってくる。

これは彼において事実そのような霊的血が彼の中に――私たちと同じ血管の中に、同じ血の中に――その霊的血が流れていたからです。私たちの中にキリストの霊の血が、霊血が、私たちの中に今、流れている。これはキリストの愛が、贖罪の愛が私たちをかく、させている。

そういう意味において、十字架が絶対です。それなら、そのことを言っているうちに、どうですか、それは既に復活に通じているじゃないですか。どこにも切ることができないように通じているじゃないですか。それは即ち、イエスが甦えったところの、甦えりとならざるを得なかったところの、キリストにおける霊の生命である、霊の血であったのです。

だから、甦えったキリストという現象に彼らはやっとぶつかって、

「ああ、キリストはやっぱり甦えった。これは神さまの子だ」

と言って、彼らは気がついたけれども、その本当の意味はいずこにあるかというと、その

同じ血が別な像（かたち）をもって現われてきている。もっとすごい次元をもって現われてきている。それが復活のキリストである。

彼は、だから、ルカ伝の終りに書いてある通りに、お魚を食べることもできれば、自由自在です。閉じた部屋の中にも入ってくることができれば、今までの地上にあったキリストよりか、もっとはるかに自由なキリストです。もっと驚くべき実体です。そういうキリストがやがて、霊界に姿を消してしまう。消すけれども、いないのではない。その驚くべき神さまの無限の生命が今度は、そのキリストの約束の霊として、万人に自己を全的に与えるところの――甦えりではなかった――聖霊のキリストとして臨んでくる。だから、十字架・復活・聖霊のキリストの証人である。私たちが証人であるとは、この全キリストの証人とならなくては。

●聖霊行伝の先を身をもって書く

そのことは、聖書にぶつかった最初の時から、地上において聖書を読む最後の時まで、私たちが聖言の証人として、聖書の証人としてのアルファ（始）でありオメガ（終）である。それにもし、私たちの全願いが、全願がそれに集中していないようなクリスチャンであるならば、つまらんです。またこれが、

「私は何もできないけれども、ギリシヤ語もヘブライ語も知らないけれども、私の中にはキリストが生きてござる！　十字架の愛が流れている。活けるキリストの光が輝いている。御霊があふれている、溢れつつある」

ということを限りなく受けつつ、限りなく告白し、常に満ちながら、常に無限に満ちている。常にあふれながら、無限にあふれていくというような角度になってくるならば、これはその人の全実存が、いかなるその他の人間的な偉そうなものよりも素晴らしいのです。

何の条件も要らん。何人（なんぴと）もこの証人とはなれる。何か条件がなければ証人となれないような内容ならば、それは最高の内容じゃない。最高の内容は、学問があって最高学府を出て、ギリシヤ語ができヘブライ語ができ、参考書が読めるような、そういった人が最高の証人になるんじゃない。

台所で働いて、ただ日本語の聖書しか読めない。その人が最高の証人になれるんです。どんな神学者よりも、どんなバルト先生よりも、どんな人よりも、その人において最高のものが現われる。即ち、キリストは各人において絶対的なものとして現われようとしていらっしゃる。絶対的なものとして、証人たらしめようとしていらっしゃる。皆さんのアンビションは、もし野心というならば、これだけが私たちの野心です。これだけが私たちの望みです。これだけが私たちの誇りです。キリストを誇るんです。

そうなってきたらば、身が弱かろうが、環境がどうであろうが、運命がどうであろうが、

「何でもござれ！　わがうちにあるこのキリストを如何せん！」

という証人になったら、人生はその人は勝利者である。そうでない限り、どんなにそれがよさそうに見え、幸福そうに見え、立派そうに見えましても、それは敗北であります。キリストを本当に受ける者、この十字架・復活・聖霊のキリストを身に体する者、身証する者、身をもって証しする者が、身をもって告白することができる。これだけが私たちの人生の最初であり終末である。そしてこれが本当の勝利です。

何ものが来ても、その人には勝てない。なんとなれば、その人はキリストの証し人だから。皆さん、その自信は、キリストに在って持ってくださいよ。

「私はまだダメです」

なんて絶対に言わせませんぞ、「私はまだ」なんて。「私はまだ」に決まってますよ、私たちはもし、「わたしは」と言って自分を見たら。「私はまだ」ではない。「私」はいつまでたって「まだ」というものです。「私」はどうにもならない。けれども、「私」の、この「未だ」なるどうにもならない私の中から、未だでないところの、常にあふれて止まないところのキリストが――これを言うのは単なる頭脳の信仰では言えないんです、力みでは言えない――これはキリストが、

「お前たちに一番大事なこと、私が去るのが益である。じかじかに一緒に居たが、私がいなくなって天界に行けば、もっともっと、私はお前たちに近くなる。近くなるどころじゃない。お前たちの中に入るぞ、中に！」

と言うんです。そうしたらば、

「地の極までも、世の末までも、私はお前と一緒にいる。お前の中にいる。そして、私の証人となる。私の証人となるということは、神の栄光体となる、神の栄光を現わすということだ」

と。使徒行伝は何を語っているか。キリストを語っている。キリストを現している。だから、パウロが最後はどうなったか、ペテロが最後はどうなったか、そんなことはどうでもいい。キリストが、このキリストが現われたことを、キリストのことを中心にして書いている。だから、いわゆる伝記ではない。使徒の伝記ではない。謂うところの、聖霊の行伝である。キリストの、御霊のキリストの行伝である。私たちは聖霊行伝、信行一如の世界。この世界を私たちもまたこの使徒行伝、聖霊行伝の先きを身をもって書かされているんです。

私は一向書きませんので、とうとうこんな録音なんてことになってしまったけれども。しかし、録音もまた仕方ない。私は全存在をもって録音していかなくては。こんな声だけではダメなんです。皆さんも、全存在が即ち証し、即ち活ける書、「キリストの書」とパウロが言った通りです。

●最後の新天新地が来る

そのようなのが、即ちこのキリストが、

「地の極(はて)までも我が証人となる」

と。「証人」は「殉教者」と同じような言葉です。証人は即ち本当にキリストという教にすっかり自分を殉じている者です。何もただいわゆる殉教の死ばかりが殉教ではない。キリストという、彼自身が即ち教である。彼自身が即ち言葉である。彼自身が即ち行である。これにすっかり自分を托しこんでしまっているのが、「殉ずる」ということ。即ち、私たちは常に殉じている。殉じているからこそ、本当にキリストの生命が来ている。十字架・復活の事態を本当に掴(つか)ませるものは、何といってもこれは聖霊なんです。聖霊が来るまでは十字架が十字架でない。復活が復活でない。だから、パウロが何故あんなに十字架を言わなければいられなかったか。ということは、彼が本当に聖霊で突き破られたから、

「ああ、十字架の愛がなんと素晴らしいものであったか。復活の生命がなんと素晴らしいことであるか」

に気がついた。これは御霊が来たからです。そうしたらば、パウロはコリント前書15章で、

「信・望・愛」

といった。キリストの愛は、十字架は神さまがキリストにおいて私たちに現わし給うたところの愛です。「愛」とは上から臨んでくるところのものです。そして、愛の臨んで来たところの十字架の恩寵というものは、それが完成されたのが、今度は聖霊というもので臨んで来た。だから、「愛の十字架」を通して――キリストの「降臨が望み」であるとともに――キリストの愛はこの聖霊において初めて本当に私たちの中に臨んでくる。

この「キリストの愛を受けとる」ことが即ち「信」なんです。受けとることが信です。身受(信受)する。これは観念しているのではなくて、受けとることが信なんです。そうしたらば、神さまはその受けとった私たちを、この存在を本当に新天新地を来たらせる保証に、証人になさる。私たちが証人体であるということは、驚くべき新天新地への希望を現わしている。私たち自身が即ち証人であることが、同時に希望を現わしている。だから、今度は

「愛・信・望」

というものがまた貫いている。この順序は「信・望・愛」ではない。一番最初は愛ですよ。何といったって、キリストという神さまの愛が来たんですから。そして、私たちがこれに気がついて受けとったのが信さ。そうしたらば、私たちに本当に神の栄光を現わす証人となったから、本当の望みが来たんです。望みは何処(いずこ)にあるか。

「汝のうちに在り」

とキリストが言われた。天国、最後の新天新地が来る。

「歴史の最後の希望(のぞみ)は、どこを見ているか。お前の中に来て在るではないか。聖霊が即ち、望みの保証ではないか」

と。

「信仰は望むところの確信である」

とはそのことをいう。確証であると。

「キリストを受けとったことは望むところの確証である」

と。そうじゃないですか。そういうような一如の事態が即ちこの祈りにおいて受けとれるんです、この祈りにおいて。

●心を一つにしてひたすら祈る

9 **此等のことを言い終りて、彼らの見るがうちに挙げられ給う。**

証人となるという言葉をもって、

「地の極(はて)までも我が証人となろう」

と言われて、キリストは見るがうちに挙げられ給うた。

雲これを受けて見えざらしめたり。

エリヤも天界に挙げられました。ある説によると、モーセも挙げられたという。エノクも天に挙げられた。ましてやキリストは天に挙げられた。

10 **その昇りゆき給うとき、彼ら天に目を注ぎいたりしに、視よ、白き衣を著(き)たる二人の人かたわらに立ちて言う、**11 **『ガリラヤの人々よ、**

たくさんガリラヤから来てますからね、エルサレムへキリストに従って。女の人もたくさん来ていました。

何ゆえ天を仰ぎて立つか、汝らを離れて天に挙げられ給いし此のイエスは、汝らが天に昇りゆくを見たるその如く復(また)きたり給わん』

「ただ見ていてもダメだよ。お前たちは深く祈って、聖霊を受けろ」

ということなんです。

「復(また)きたり給わん」

と。「また来たり給う」というのは、「キリストの再臨」と同時に、「聖霊として来たり給う」という二つの事態が、そこにやっぱり二重写しになっていると思います。御霊として来たり給う。そしてまた、やがてキリストは来たり給うと。

12 **ここに彼等オリブという山よりエルサレムに帰る。**

即ち、キリストの昇天されたところは、オリーブの山です。

この山はエルサレムに近く、安息日の道程(みちのり)なり。

「安息日の道程(みちのり)」は何キロかということは書いてありますけれど、説明はやめましょう。

13 **既に入りてその留まりおる高楼(たかどの)に登る。**

みんなが集会していた二階みたいな――二階か三階か知らんけれども。パウロがどこかで話していたときは、三階なんて書いてあったな――高楼(たかどの)に登った。

ペテロ、ヨハネ、ヤコブ及びアンデレ、ピリポ及びトマス、バルトロマイ及びマタイ、アルパヨの子ヤコブ、熱心党のシモン及びヤコブの子ユダなり。

14 **この人々はみな女たち及びイエスの母マリヤ、イエスの兄弟たちと共に、**
そこにマグダラのマリヤも女たちの中に入っています。ヨハンナなんてのもいたかな。
心を一つにして只管（ひたすら）いのりを務めいたり。
15 **その頃ペテロ、百二十名ばかり共に集りて群をなせる兄弟たちの中に立ちて言う、**
ペテロは大体その中心になっていたようですけれども、
「心を一つにして只管（ひたすら）いのりを務めいたり」
という。即ち、男も女もみんな一緒になって、心を一つにしてひたすら祈っていた。
祈りは一人で深く祈ることと、それから、こうやって皆さん集まってまた、
「二、三人わが名によりて集まるところに我もまたそこに居るなり」
という、数人で集まって祈るということと、一人で祈るということを並行してやっていらっしゃるのが一番健全です。どうかそれを――もう実行していらっしゃると思いますが――いよいよ続けてください。やがて、ペンテコステ、6月9日がきますが。
彼らがもし、祈り求めることがなかったならば、御霊はそっぽを向いてしまう。御霊は彼らが本当に復活のキリストに出っくわして、初めて彼らの眼が少し開けてきた。

●ジョン・ウェスレーの回心

ジョン・ウェスレー〔ジョン・ウェスレー（John Wesley、1703～1791）は18世紀のイングランド国教会の司祭で、その後メソジスト運動と呼ばれる信仰覚醒運動を指導した人物。この運動から生じたのがメソジスト派というプロテスタント教会であり、特にアメリカではプロテスタント系で信徒数第二の教派である。聖化を強調し、ウェスレー派のメソジストとホーリネス運動に継承されている〕は、ちょうどこの5月24日、昨日です。オルダス・ゲートという街、ストリートですね、集会にあまり行きたくなかったけれども、行ったんです。そうしたらば、ルターの『ローマ書の序文』――私は教科書に作りましたけれども――ローマ書の序文を読むのを聞いた。それが9時15分前頃だったと書いてありますが、彼の日記の中に。

「神はキリストを信ずる信仰を通して、心にもたらし給う変化を述べているとき、自分は自分の心が奇しくも、燃えるのを覚えた。自分は自分がキリストを信じ、神がキリストのみ救いを与え給うことをひしひしと身に感じてきた。」

というのでありまして、それから、

「自分は特に自分をあなどり迫害する人たちの為に全力を注いで祈り始めた。そうしたら、今まで心に感じていたことを今、初めてそこに居たすべての人たちの前に包まずに、隠さずに証をした。」

いろいろ反対者もあったようですけれども、それがこのウェスレーが回心する動機であって、ローマ書の序文――マルチン・ルターの有名な本ですが、短い本ですけれども――そ

の中に信仰のことが書いてある。いつかも言ったかも知れませんが、

「信仰は神の業（わざ）であって、私たちを新しく生まれさしめ、そして、私たちの心や理性や感情や、そういったものを全部、全人的に新しくしてしまう。と同時に、その人に聖霊を与えるものである。これを本当に信仰という。」

という言葉がある。本当に聖霊が入って来ないような信仰は未だ手前の信仰です。しかしながら、本当の信仰は、私たちが神さまに深く祈って――「祈り」とは自分を神に任せること――キリストの中に自分を投じることです。それは、何処においてするか。

「十字架のキリストを深く仰いで、そしてこれに自分をすっかり投ずる」

ことです。実に十字架の中に自分たちが投ぜられている。十字架の中に投ぜられていると、別の展開が起こり、愛の生命が流れる。

水のバプテスマは同時に、霊のバプテスマに通ずる。先ず水のバプテスマを受けてからしばらくたって――それは時間的には暫くたつことになるかも知れませんよ――質的にいえば、いつもそれは相即する事態なんです、本当は。

ウェスレーが夜、家へ帰ったら――霊魂がある意味において非常に高揚しますと、またサタンがくる――サタンが誘ったものだから、また誘惑に打ちのめされた。即ち、自分というものが投げ出されると、空っぽになるでしょ。そこに本当に深くキリストの生命を、御霊を、十字架を通して御霊を受けていないと、ただお留守になっているというと、サタンがやってきます。それで誘惑に打ちのめされたものだから、このウェスレーは、

「大声に叫んで、『キリストよ！　父よ！』と呼んだ。そして誘惑に勝った」

と書いてある。そして、25日のちょうど今日です。

「眼を覚ました瞬間に『イエスよ、主よ』という言葉が口と心に満ちていた。そして、我が全ての力は眼を主に注ぎ続け、霊は常に主にはべるところにあることを発見した。」

と。夜も深く祈ったんでしょう。そしたら、何か知らないけれども、自分の霊魂の中から、

「主よ！　イエスよ！」

という声が込み上げてくる、ほとばしってくる。これは御霊によって叫ぶところの声です。そういうようなわけで、ウェスレーがちょうど今日この頃、回心を起こしたわけでありますので、申し上げたのですが。これは勿論、１７３８年のことです。

●死んでも死なない生命をいただく

どうか皆さん、この

「心を一つにして只管（ひたすら）いのりを務めいたり」

と。お互いに助け合うんです、祈りは。

「人が何を祈っているだろうか」

じゃない。互いに助け合って、そして心を一つにしてひたすら祈っている。一人で祈って

いる時も、人のために執り成して祈っている。そういうようにして、深く祈る。今、肉体の状態がどうでありましょうとも、活けるキリストの証人ですよ、皆さん。

「もう少しよくなってから証人になろう」

ではない。今、現に証人です。キリストの生命は――私たちの肉体のいろんなすべての環境やそんなことに拘らず――常にそれを荷っていくし、勝っていくし、潔めていくし、強めていくし、生命を与えていくんですから、これを受けとりつつ進んでいきましょう。

16『**兄弟たちよ、イエスを捕うる者どもの手引となりしユダにつきて、聖霊ダビデの口によりて預じめ言い給いし聖書は、かならず成就せざるを得ざりしなり。**

あと、ユダの代りに一人の使徒を選んだことが書いてありますが、こんなことはいいです。時間もきたようですから。

私たちはこのキリストの証人となると、このことが今、現に私たちは、私は語りあなた方は聞きながら、その喜びの中にひたりつつある。もうどんなことがありましても、環境をうらやむことも、運命を悲観することも、何もないです。

「千万人といえども我往かん」

というのは決して大言壮語でも何でもない。イエスはそれ以下のものではない。どうか皆さん、この療養所において多くの人はいます。けれどもまた、療養生活がなかなか苦難になってきた。今日も、ラジオで誰か療養者が訴えていましたが、しかし、どうでもいいです。「どうでもいい」って、それはより善きことが結構ですけれども、そういう問題はそういう問題として勿論とっくんで結構ですけれども。

大事な一番取っ組まなければならない問題は、私たち一人ひとりが真にキリストの永遠の生命を、死んでも死なない生命をいただくことです。どんなに憎しみや、争いや、冷たさの中にあっても、絶対に愛であるところのこの生命。本当の義とは、そのようなキリストの救いの贖罪の愛において、キリストが完全に神の聖意を受けとっていたその事態が義であるから、キリストの愛を受けとった時に、同時にキリストの義そのものが私たちの中に来るんです。キリストは本当の義人である。本当の愛人であるんです。そういう証が私たちの絶対無条件の世界でもって、最高のところに来れると、

「人生の目的は既に私は発見した」

と、皆さんが一人ひとりが、

「我、人生の目的を発見せり」

といって、喜んで戴かなければ困る。そうして、明日も次の日も、もう喜びと希望と能力（ちから）とがあふれていきます。絶対不滅です。なんとなれば、キリストであるから。どうか、死に至るまで、死を突破しても、ただ証人として生きる、イエスの証人として生きる、というこの一念を深く念として、進んで戴きたいと思います。終ります。

●祈り

今日は雨の日でありましたが、しかし、愛する兄弟姉妹たちと共に今、この使徒行伝の第１章に食いつきまして、神さま、イエスが、キリストが、

「汝ら、地の極（はて）までも世の末までもわが証人となれ」

と言われたこの聖言は私たちに大歓喜の音ずれとして臨んできました。感謝いたします。神さま、本当にイエス・キリストが一切をなしてくださいますが故に、私たちは証人となれます。

「この聖書は我につきて証しするものなり」

という、イエス・キリストを、聖書の何処を読みましても、そこにキリストの証言を見、またそこにキリストの証人にぶつかり、私たち自身がその証人とせられ、進んでいくことができますように願い奉（まつ）ります。

お父様、全キリスト教界がどうでありましょうとも、どうかこの一人ひとりが、この地球上の方々、諸国のキリスト教界が、新しくペンテコステを迎えるに当たり、本当にこの使徒たちと同じく、証人とならんとの志を新たに興（おこ）し、相共にたずさえて行くことができますように願い奉ります。

お父様、信仰がどうである、また神学がどうである、聖書知識がどうである、そんなことではありません。本当に私たちがキリストの証人となるということは、そんな人間的な相対的なことを勘定していることではありません。いよいよ、あなたの前にぶっつぶれ、主イエス・キリストの十字架に十字架せられ、あの驚くべき生命、驚くべき智慧、驚くべき愛、驚くべき光が、私たちの中に体現せんとなし給うところのご恩寵に貫かれ、浸透されていくことができますように願い奉ります。

兄弟姉妹たちと共に、一切の運命がどうであろうとも、これを乗り越え、いや実にこれを包み、これを支え、これを荷い上げていくところの驚くべき生命力と、いよいよなし給わんことを願い奉ります。

お父様、本当に嬉しいです。主イエス・キリストの証人となり、貴神の栄光を現わし奉ることができますように、いよいよ進ましめてください。赦され赦されて、そしてまた、貴神（あなた）から本当に憐れまれ、また貴神に潔められ、強められて進んでいきます。どうか、この兄弟姉妹たち一人ひとり、かけがいのなき存在として……〔以下録音切れ〕……。